



フェスティバルホールで、守屋中子撮影

シナジー synergy talk
新・上方風流

約半世紀前に結成された芸能・文化人の交流グループ「上方風流」にちなみ、多彩なジャンルの人々が語り合う「シナジーターク」。第3回は、指揮者の井上道義さんとバレリーナの土野水香さんが、音楽と踊りという表現手法の相違と共通点について意見を交わす。2人は大阪・フェスティバルホールで先月、「コンサート+バレエ」を公演したばかり。楽団が舞台下の演奏席「オーケストラピット」に入るバレエ公演の常識を破り、ダンサーと同じステージ上で演奏するユニークな取り組みだ。2人は「今後よりタイプの良さを伝えたい」と意欲を見せている。

【シナジー】相乗作用で、より大きな結果を生み出すこと

音楽と踊り 対等な関係



井上 子供の頃にバレエを習っていた、初恋の人を忘れられないのと同じで、バレエに関わりたかった。今度の公演を企画しました

井上道義さん 指揮者

いのうえ・みちよし 大阪フィルハーモニー交響楽団首席指揮者。1946年東京生まれ。桐朋学園大卒業。71年、伊グイド・カントレルリ指揮者コンクールの優勝。ニュージーランド国立交響楽団首席客演指揮者、京都市交響楽団音楽監督などを歴任。躍動感ある演奏に定評があり、実験的な企画にも挑む。

たチャイコフスキーの「白鳥の湖」は踊りなしで演奏することが大半だけれど、元々はバレエのために作られた曲。初心に戻り、ジャンルの壁を越えるような、小さな穴が開けられるような、小さな穴が開けられたい。踊り、音楽、オーケストラは舞台下に配置されていますが、今回は同じ場所にいるので、舞台の後ろから音が迫ってくるような感覚を味わいたいです。踊り、音楽、オーケストラは舞台下に配置されていますが、今回は同じ場所にいるので、舞台の後ろから音が迫ってくるような感覚を味わいたいです。踊り、音楽、オーケストラは舞台下に配置されていますが、今回は同じ場所にいるので、舞台の後ろから音が迫ってくるような感覚を味わいたいです。

× 上野水香さん バレリーナ



うえの・みずか 東京バレエ団プリンシパル。1977年神戸市生まれ。5歳でバレエを始め、15歳でローザンヌ国際バレエコンクール・スカラシップ賞受賞。2004年から東京バレエ団在籍。脚のラインの美しさと身体の柔軟性を生かした表現が持ち味。海外の特別公演にも多数招かれている。

細やかな感情まで表現

多大なプレッシャーを感じた。成功して本心に何の荷が下りました。今回、僕にとっても知っているようで知らない世界だったと気付かされた。今は、インターネットでバレエの動画や演奏の評判を検索できる。それだけで全てを分かった気になってしまふ人もいます。それには怒りに近い不満がある。実際に見聞きした経験で判断してほしい。

井上さん(劇作家の)野田秀樹さんが携わったオペラ「フィガロの結婚」を見ました。クラシック音楽に和の要素を混ぜて歌舞伎みたいな雰囲気があった。今の時代の感覚を反映していると思えます。井上、そう感じてくれたらありがたい。

重なり合った時にこそ、細やかな感情まで伝えられるようになる。それが面白いですね。井上、そう、音楽が踊りの伴奏ではなく、対等な関係で舞台に立つのは楽しい。公演の練習中、楽団員は興味津々にバレエを見ていた。きっと気づいたことがあるはずなんです。この試みがどんなに大変なことか分かっているつもりでしたが、実際にやるとなると



「白鳥の湖」を踊る上野さん(手前)と、大阪フィルを指揮する井上さん(2月20日、フェスティバルホールで)撮影・飯島隆

取材を終えて

言葉に力強さのある井上さん、聡明な上野さん。どちらの話も説得力が感じられた。「コンサート+バレエ」では、オーケストラが演奏する目の前で、上野さんら3組のダンサーがバレエを披露した。上野さんは「白鳥の湖」の一場面に出演。白鳥のオデットに成り代わり、王子を救う。感動する黒鳥役として、王子役を相手

に情熱的に舞った。赤い舞袖が黒鳥の衣装が映える。演奏が始まる。普段のバレエとは違う、迫力ある音に圧倒された。

カーテンコールでは、3組が勢ぞろいして楽器を演奏する様子。上野さんがダンサーに促されて指揮台の上でターンを決めたりと、会場は大いに沸いた。(倉岡明菜)